

## フォーラム修了レポート

### 多様性を様々な角度で見る

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

今回、この「Diversity & Inclusion」をテーマにフォーラムを行うにあたって、私は大学で頻繁に学んできたジェンダーに関する学びや多文化共生についての学びについて思い返してから臨んだ。しかし、大学の授業での学びだけでは、まだまだ足りないのだということをフォーラム内の発表によって思わされた。

最も記憶に残っている発表はクンツ先生によるジェンダーに関する発表である。ご自身の一般的なジェンダー観に当てはまらない体験に基づいたジェンダー考察についての知ることができ、非常に貴重な時間だった。「女性らしさ」「男性らしさ」というものの再生産が繰り返されている事実とその根底に隠されているものはなんなのか、というのを再び考える機会となったし、先生のご体験と科学的なデータに基づく事実との照らし合わせによって浮かび上がってくる疑問がより私のジェンダー理解を進めてくれたように思う。

上記の疑問に対する現時点での私の解は、“「女性らしさ」「男性らしさ」の分かりやすさを利用するために「らしさ」を強要する人々の存在と、「らしさ」を体現することによって得られる利を得ている人々の存在が、性別役割や性差を強要する社会的規範の再生産を促しているのではないか” というものである。なかなか改善されない日本の男女差別には、それによって利益がある人々の存在が必ずいるはずだという考えに基づいて出した答えだが、それは今回拝聴した先生の講義によって得られた知見である。引き続き、ジェンダー問題についても考えていきたい、考えていかなければならないと思われた時間であった。

#### 2. 言語使用・学習の側面

今回同じグループに配属されたバツサー大学の学生の皆さんとお互い言語を交換し合

って交流をしたが、実際のところは完全に“バツサー大学の学生は日本語、お茶の水女子大学の学生は日本語”という原則を守っていたわけではなかった。私のグループの場合は、チャット上ではほとんど英語で会話が進められ、オンライン会議上ではお互いが話しやすい言語で会話を進める場面もあった。

こうした結果になってしまった理由には、やはり英語が公用語であるという意識が強いことが伺えるのではないか。初めは日本語を頑張って話そう（打とう）としてくれていた学生も、私たちが英語を話せると分かると英語での会話をしようという提案をした。もちろん、バツサー大学の学生も日本語を頑張って話そうとしてくれていたし、フォーラム本番には流暢な日本語を披露してくれていた。しかし、言語に優越はないはずではあるものの、やはり英語を話せることがスタンダードである、という意識がどこかにはあるのではないかと感じた。

### 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

第三に、事前学習とフォーラム全てに渡って、オンラインという手段を用い、発表と討論が行われました。その意義と限界についてクリティカルに分析してください。

まず、オンラインでの実施の意義としては、お互いに負担が少なく交流することができるという点である。どちらかの国に集まるとなると、資金的にも体力的にも時間的にも制限がかかるので、その制限がないことによってより多くの人が参加できるという点に意義があると感じた。

しかし、オンライン開催の限界としては、親密度を高めるという点と語学上達という点という2点が挙げられるのではないか。画面上のやり取りになると、どうしても発話者の雰囲気を読みきれず、誤解が生まれてしまう。また、2週間に一回というペースで1時間の交流となると使用言語に慣れにくい。この2点においては対面開催の方がより効果が見込まれると考えた。

### 4. 自身の担当

私が今回所属していたグループのテーマは「人種問題(racial issues)」だった。このテーマを選んだ理由は、日本で生活しているだけでは感じることの少ない人種差別という問題を異なる国に暮らす学生から教えてもらったり、気づきをもらったりしながら、日本における人種差別について考えを深めたいと思ったからである。最終的に、私たちのグループは人種問題の中でも「アジア人差別」に焦点を当てて、調べ、発表することに決まり、私は日本におけるアジア人差別の具体的事例について調べて発表した。

私が発表で用いた事例は、在日韓国人差別に関する問題である。その中で避けることできない話題として「ヘイトスピーチ」が挙げられる。ヘイトスピーチとは特定の国の出身者であること又はその子孫であることのみを理由に日本社会から追い出そうとしたり危害を加えようとするなどの一方的な内容の言動のことだ。2011年くらいから発生し始め、2013年にはメディアにも取り上げられるようになった。

日本における在日韓国人へのヘイトスピーチは主に在特会によるもので、在特会とは「在日特権を許さない市民の会」の略称で、2006年に創立された組織だ。在特会の公式ホームページによると、日本国内に居住する在日韓国人が特別永住資格やさまざまな経済的便宜などの特権を不当に得ているとして、その撤廃を目標にデモや集会などの活動を展開している。この組織に対して、警察庁は「極端な民族主義・排斥主義的主張に基づき活動する右派系市民グループ」であると定義付けている。

また、政府の調査によると2012年から2015年に把握されたデモの主なテーマは「慰安婦問題」「竹島問題」「産経新聞ソウル支局長起訴問題」「拉致問題」「北朝鮮核実験問題」と多くが韓国に関するものであり、「外国人排斥」をテーマにしなくてもこのように韓国を標的にしている場合が多いようだ。

では、どうしてヘイトスピーチが発生するのかという疑問が浮かぶが、考えられる原因は主に二つあると考えた。まず一つ目は、「人々の不安」だ。統計を見ると、ヘイトスピーチが増えたのは東日本大震災が起こった2011年以降で、震災のような非常事態において、人々に余裕がない時に勃発する傾向にあると言える。二つ目は、両国の外交関係悪化だ。飲食店を対象とした研究調査の結果によると、日韓関係悪化によってインタビューを受けたほぼ全員が売り上げの減

少を言及した。

<参考文献等>

・ [ヘイトスピーチ、許さない。/法務省](#)

・ [ヘイトスピーチに関する聞き取り調査（全体版）/法務省人権擁護局（平成 28 年 3 月）](#)

・ [日韓・日中関係悪化が在日韓国・中国人に及ぼす影響調査, 藤巻秀樹, 2014 年 12 月 13](#)

[日](#)

・ [在日コリアンに対するヘイトスピーチとイデオロギーへの呼びかけ—ジュディス・パトラーによる「主体化」論を手引に—, 2014](#)

## 立場の異なる2国間の交流について

### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

日本とアメリカという、特性の異なる2国を比較しながら、人種や言語の多様性、および包括する上で課題となっている現状について、歴史的背景をふまえて検討することができた。特に私の所属したグループ1では、メンバーが皆アジアにルーツにあったので、日本国内とアメリカ内でのアジア人差別の実態について調査した。特に興味深いと思ったのは、日本人は歴史的な理由から中国や韓国に対して嫌悪を抱いている人が多いこと、さらにそれ以外のアジア諸国に対しては経済的発展をひとつの尺度にして、見下す傾向があることがメンバーの経験やデータから読み取ることができたという点である。

しかし、アメリカにおいては、日本人も中国人も韓国人も容姿が似ていることから互いに親近感を抱いたり、白人からの差別もともに経験したりするというエピソードがあり、国内と国外とでは日本人の振る舞いや、日本・日本人というイメージも異なるのではないかと考えた。そのうえで、社会的に多様性を包括する方法は普遍的ではなく、その地の特性に合うものでなければならないということを改めて認識した。また、多様性への理解という点では、現在では特にジェンダーに対する配慮や法整備が急務として取り組まれているが、国籍や人種をもとにした差別は長年議題にあがっているものの、解決には至っていないので、グローバル化が進む中で、今一度国籍や人種についてタブー視するのではなく問題と向きあう必要があるのではないかと考えた。

### 2. 言語使用・学習の側面

言語の使用については、やはり深い議論になるにつれて互いの母語に頼ってしまうので、しっかり相手に伝わっているのか不安になった。また、やさしい日本語を使おうという意識がかえって、言葉足らずとなって詳しい説明を後付けするために、倒置法ばかりの文章で文法の整っていない文章になってしまうことにもどかしさを感じた。成果と

しては、日程調整や役割分担について、伝える段階では自分の英語力に自信がないので不安ばかりだったが、結果的にはすれちがいが起こることなく伝達できていた。一方で、英語力ややさしい日本語で伝えられる情報には限界があるので、言おうか言わないか悩んだ末に、反論しないでしまった場面も多くあったのが反省点であると考えられる。

### 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

オンラインでの実施によって、グループ内の話し合いのために zoom のミーティングは開催しやすいと感じられたが、電波障害や音声の不明瞭性によって聞き取れない部分もあったので、慣れない英語だと特に何を伝えたいのか分からないということもあった。また、ヴァッサーの学生は皆日本語が上手だったが、議論が深まっても日本語での伝達を挑戦していたときに、なるべく私も汲み取ろうとしていた一方で zoom 越しだとうまくフォローに入れないという場面もあったので、オンラインの限界も感じた。

### 4. その他

私たちのグループでは、プレゼン資料の作成よりもお互いの経験や意見交換に重点をおいたので、実際にプレゼンでは言及しなかったことも多かった。その中で注意が必要であると考えたのは、「アメリカ人は～」 「日本人は～」 という大きい主語で傾向を説明しようとしてしまったことである。私は自分の英語力の乏しさを理由にうまく伝えられなかったが、「日本人はどうして～なんだろう？」と言われたときに少し嫌な気持ちになってしまった。そこで学んだことは、相手の立場について知り切ったつもりにならないことが立場の違う両者の円滑なコミュニケーションには必要な配慮であるということである。

### 5. 自身の担当

私の担当は、日本国内のアジア人差別に対する政府の取り組みと期待がテーマだっ

た。法務省によると、日本政府は特にヘイトスピーチに対して調査し抑止するための取り組みが多く、ヘイトスピーチ以外の差別にはあまり着手していないことが問題であるとか考えた。外国人向けの相談ダイヤルはあるものの、ヘイトスピーチ以外の差別の現状を知らないままでは、相談を受けても解決まで至らない可能性があるのではないかと考えた。そこで、政府だけでなく学校やオフィスにおいて、生活や仕事での日々の小さなじめ等まで調査し、問題があれば解決方法について議論する姿勢が必要であると考えた。日本では、技能実習生の受け入れ以来、多くの外国人が労働者として来日しているが、今後は家事労働等の分野でも外国人の受容が進むのではないかと考えられている。労働者が増えれば、その子世代として外国人の子どもが増えることになるので、オフィスや学校を含めた全世代の多文化共生が図られなくてはならないだろう。日本が外国人にとって住みよい環境になるように、日本人に対する教育も実施していく必要があるだろう。

## フォーラム修了レポート

### 多様性の尊重と包摂を両立するために

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

まず事前準備の中では、アメリカにおいてアジア人差別が生じるコンテキストを学んだ。ヴァッサーの学生は、アジア人はアメリカへの移民の中では比較的歴史が浅く、自分がルーツを持つ国に対して強いつながりの意識があると話していた。アフリカにルーツを持つ人たちは奴隷貿易から今に至るまで根強い差別を受け続けているものの、彼らがアメリカに渡ってからはかなり長い時間が経っており、彼らのアメリカ社会への包摂自体は歴史の中で着実に進んできたという。一方でアジア人は2世、3世が多く、アメリカ国内で中国人コミュニティや韓国人コミュニティなどの独自のコミュニティを作っており、それが彼らのアメリカへの包摂にとってはあまり良くない影響をもたらしているという。議論の中では実際にアメリカでアジア人として過ごしてきた学生の具体的な経験談も多く聞くことができ、アメリカの中でアジア系の人たちが置かれている状況について理解を深めることができた。ただ、自分のアイデンティティを持ち続けることと自分が暮らす社会に溶け込むことをどうすれば両立することができるか、という議論まで辿り着くことはできなかった。現状の確認はもちろん大切だが、将来に向けた解決策まで議論するべきだったと反省した。

その二つを両立する方法に関しては、他の2つのグループの発表が非常に参考になった。両グループの発表はどちらも言語教育に焦点を当てており、言語教育が多様性の尊重と包摂の二つを両立するために重要な役割を果たすということ学んだ。包摂を促進するためにはその国の公用語が母語ではない人たちへの言語教育をする必要があり、また多様性を尊重するためには公用語以外の言語に子供達が触れられるような言語教育をする必要があるのだという。この2つをバランス良く行なっていくことで、多様性の尊重と包摂のどちらかに偏りすぎることがなくなるはずだと感じた。ただ、それらを「バランス良く行う」ためには教師の知識や技術が不可欠であり、そのような教師を十分に確保することはアメリカでも日本でも共通の課題であるはずだ。教師を確保する方法に



関して議論をすることは難しいものの、そこにも踏み込むことができればより深い議論をすることができたのではないかと思った。

## 2. 言語使用・学習の側面

双方の言語を用いたことの成果としては、お互いに対して親近感を持つことができたという点が挙げられる。私は自分とは違う国に住んでいる人に対して心理的な壁を感じてしまうことが多いが、今回は相手が自分の国の言語を話してくれたので、すぐに心の距離が縮まったような感覚を覚えた。また、議論が複雑な内容になることも多かったため、英語では理解が追いつかない場合には質問をすれば日本語でも説明をしてくれるということへの安心感も大きかった。

双方の言語を用いることの限界としては、先生が授業でも言っていたようにやはりヴァッサーの学生が日本語を話す割合の方が、日本側が英語を話すよりも多かった点が挙げられる。全体の議論を通しての言語の割合は、体感では日本語が7割、英語が3割ほどだった。日本側も英語を使っていこうという努力自体はしていたものの、ヴァッサーの学生が非常に日本語を流暢に話していたため、それに甘えてしまったという側面は否めないだろう。私自身も難しい単語や説明しづらい事象については、英語で相手に上手く伝わるかが不安になってしまい、正確に伝えることが最優先だという考えから日本語を使ってしまうことも多かった。英語力の向上はもちろん重要だが、伝わらないことを恐れすぎることなく発言をしていくべきだったと反省した。

## 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

まずオンラインの意義としては、事前学習の際にみんなにとって都合が良い時間に集まって議論ができた点が挙げられる。私たちの班では授業時間以外にも3回ほどミーティングをすることができ、そこではプレゼンには直接的に結びつかないような多様な話題に関して話し合うことができた。これがもし対面の場合であれば、どちらかの国の人の方がもう一方の国に滞在できる時間はそれほど長くはないため、そのようにじっくりと議論をすることはできず、プレゼンに向けた準備だけに追われていたと思う。また、ほとんどの人が自室からミーティングに出ていたのもみんながリラックスしていたのも良か

った。あまり気負わずに議論をすることができたので、終始良い雰囲気が保たれた。

オンラインの限界としては、やはり対面に比べると相手の反応がわかりづらいという点が挙げられるだろう。授業外のミーティングではカメラをオフにしている人がいる時もあり、その際はその人にきちんと話が通じているのかを確認することが難しかった。ただ、やはりカメラをオンにすることを義務付けることはできないため、そのような状態で議論を進めていかなければならなかった。当然カメラをオフにしている人はカメラをオンにしている人に比べると発言が少なくなりがちであるため、その人とは十分に議論ができなかったと感じている。

また、フォーラム当日ではオンラインの限界が特に目立ったように感じる。まず質疑応答の際に質問をしづらい雰囲気があった。生徒から誰も質問が出ず、先生が初めに質問をするという場面も多く見かけた。やはりオンラインの場でみんなの顔も見えない中で、ミュートを外して発言をすることへのハードルは高かったように感じる。また、最後の全体討論の際にも先生からの質問に数人が答えるというだけで終わってしまい、あまり深く議論することはできなかった。もし次にもオンライン開催だった場合は、最終討論ではブレイクアウトルームを利用することで、もっと一人一人が発言するようになるのではないかと思った。

#### 4. その他

フォーラムの最終日に先生からの言及もあったが、自分のグループ以外の学生とも議論をする機会があった方が良かったと思った。今回は他のグループの人たちに関しては顔も名前もほとんど覚えられないまま終わってしまったことが心残りだった。オンラインであったために授業後の交流などを持つこともできず、フォーラムでも話す機会を得ることはできなかった。改善案として、事前授業の際にブレイクアウトルームでメンバーを入れ替えながら交流をする機会を設けたり、フォーラムの際にはプレゼンの後で少人数に別れて、そのグループの中でプレゼンをした人に対して直接質問をするという機会を設けたりすると良いのではないかと思った。

#### 5. 自身の担当

事前学習では日本国内でのアジア人差別の歴史を調べ、スライドにまとめた。フォーラムではスライドにまとめた部分の発表と司会を担当した。

## フォーラム修了レポート

### 言語を通した Diversity & Inclusion

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

強く感じたのは、マジョリティ、マイノリティ双方の現状や意識を変える必要があるということである。特に私のグループが担当した言語教育の観点では、言語は文化を媒介するものであり、どの言語を学ぶか、使用するか、という選択が特定の文化・民族の社会における立ち位置、扱いに大きく影響すると感じた。マジョリティに対する外国語教育では、話すことを想定した、実践的な学習機会、言語から背景文化に思いをはせるような機会を提供することが必要で、社会全体で言語的マイノリティを受け入れる姿勢を教育の中でつくる必要があると感じた。移民などノンネイティブへの教育では、学習者の生活における障壁を取り除くために、言語だけでなく、移住国の慣習や文化についても言語学習の中で理解を深める機会が必要だと考える。またほかのグループの発表を聞いて、非母語言語の学習者は言語的少数者、というだけでなく、文化、宗教など様々な観点において、二重三重のマイノリティであり、その背景から学習機会さえも失っていたり、実質的に奪われている実態を改めて認識した。自分たちの事前調査の中では、いかによい言語教育プログラムを構築するか、という観点で Diversity & Inclusion の実現を考えていたが、不法移民の問題など、社会の体制を変えていく必要性も強く感じた。総じてコミュニケーション手段でもあり、人々のアイデンティティに強く結びついた言語は、異なる他者を知り、存在を認め合う共生社会において重要な役割を持つと改めて感じた。

#### 2. 言語使用・学習の側面

授業の中でも、課外のミーティングにおいてもお茶大生よりもヴァッサー大の学生のほうが第二言語を積極的に使うよう意識していたように感じられた。それでも、事前に先生から「お茶大生はついつい向こうの学生につられて日本語を使ってしまいがち」と聞いていたので、個人的には課外ミーティングでも英語を積極的に使うよう心掛けられていたと思う。常に目の前にネイティブスピーカーがいる状態なので、互いに第二言語

における単語や表現が分からないときは気軽に聞くことができ、間違っている表現は即座に修正してもらえる点は言語学習、会話練習においてとても良い環境だったと思った。さらに、発表内容の構成について変更をほかのメンバーに提案した時、英語で話していたからこそ自分の意見を強く主張できた感覚があった。一般化して述べるには感覚的な側面が大きすぎると思うが、普段婉曲的、否定を避ける表現の多い日本語の話者が、直接的で端的な表現の多い英語を使用、また英語話者が日本語を使うことで、双方の意見の影響力の差が少なくなり、より平等に両者の意見を扱えるような状況が生まれたのではないかと感じた。ただ言語学習という側面だけにこだわるのであれば、常にお互いが異なる言語を使用して会話している状況は奇妙に感じることもあったので、英語を使う時間・日本語を使う時間という風に区切って会議を行っても、また効果的な学習機会になったのかもしれない。

### 3.オンラインでの実施（評価点・改善点）

班ごとのミーティングや発表準備に関しては、オンラインにおいても特に問題なく、有効的な学習の機会になったと感じた。個々の用事や体調に合わせて日程を柔軟に調整できた点、また google document や google slide などを活用して議事録や進捗状況を常に共有していたことはオンラインの特性が生きた点で、特にそれぞれ異なる休暇期間を挟んだ学生同士がプロジェクトを進める上で非常に役に立ち、進捗が遅れている際は互いに手助けをしあったりもした。一方、私の班では機能性に優れている Discord を連絡ツールに使用していたが、普段の使用頻度が少ないツールのせいも、連絡が滞ってしまうこともあった。

本番の発表については、他の参加者の顔が見えないこと、質疑応答が弾まないことがオンライン実施の問題点だと感じた。特に日本人側は時間帯も関係していると思うが、指示がない場合画面を出そうとしていなかった。もっとお互いに顔が見える状態を作りたい。また、最後のディスカッションにおいては、班ごとにルームに分かれて、クエスチョンについて議論する時間があったてもよかったかもしれない。交流を深めた少人数の

中で議論をし、考えをまとめたうえで全体討論という形であれば、意見を共有しやすかったと思う。プログラム自体、かなり時間のない中で進んでいたのも無理は承知だが、オンラインという環境で、対面以上に交流に制限がある分、もっと生徒同士の討論の時間が多ければ、より有意義な場になったのではないだろうか。

#### 4.その他

全体を通して、一番学びが多かったのは、対話をしているときだった。発表準備のミーティングで学生の経験について聞くときや、討論において個々の意見を聞く中で、自分とは異なるバックグラウンドで考え方が違うこと、自分の知らない事実があることを知った。発表については正直分担作業になった部分が多かったのも、もっと対話を重視したプログラム構成でもよいと思う。

#### 5.自身の担当

発表については、「日本における英語教育」「アメリカにおけるノンネイティブへの英語教育」を担当した。また二か国の言語教育における相違点・共通点の洗い出し・スライド作成も行った。グループの中での役割としては、主にスケジュール管理と、ヴァッサー大生の原稿の添削を行った。添削に関しては、同じようにお茶大生もヴァッサー大生から添削を受けた。

## フォーラム修了レポート

### 言語教育における多様性と包摂性の役割とは

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

私たちグループ2では、日本とアメリカの言語教育を分析したのちに、それが両国の国内の現状をどう改善することができるのか、について調査、発表をした。グループのメンバーとの調査や準備の期間を通じて、言語との距離感、それから、言語がその国でどのように捉えられているかの違いに気づくことができた。使用する言語によって、我々は自分たちをカテゴライズする。そしてやはり、マジョリティが使用する言語が社会で影響力をもち、優先される。私たちの調査のなかで、アメリカにおいても、日本においても、同じく問題としてあがっていたのは移民の人々に対する第二言語教育が発展途中であるという点、それから現在自分たちの国で行われている外国語教育が不十分である点であった。

今回のこのフォーラムを通して、“Diversity”と“Inclusion”（ここでは、それぞれ「多様性」と「包摂性」と捉えさせていただく）とは、言語教育のなかでも、社会的にマイノリティとして位置付けられる人々に一方的に押し付けるものではなく、社会全体で、社会を構成する1人ひとりが協力して多様性や包摂性について理解し、実現していかなければならない課題であると感じた。先に挙げた、日米それぞれ2国の第二言語教育と外国語教育を例として挙げると、まず、特に、非母語話者である移民の人々、学ぶ側の人々だけではなく、母語話者の人々も、第二言語教育について理解を深める必要性があると思う。なぜなら、全ての言語について言えることだが、母語でない言語を完璧に話せるようになることはまず不可能であり、そのためには多大な時間と努力を必要とするため、外からやって来たのならこの国の母語を話すことができ当然だ、などという同調圧力はなにも意味をなさないからである。それよりもむしろ、日本であれば、「やさしい日本語」という言語について国語の時間などの時間に学習する取り組みや、アメリカであれば、英語ばかりを集中的に教えこむのではなく、学習者の母語の保護や

尊重も同時に並行して進めることができるのではないかと感じた。また、それぞれの国で行われている外国語教育についてであるが、私は、「話したいから話す、楽しいから学ぶ」外国語教育を日米どちらも実現できるとよいと感じた。日本の場合、多くの生徒、学生が受験のために勉強しなければならないから、問答無用で外国語教育という名の英語教育が浸透してしまっている。これは、日本人の言語に対する捉え方も狭めてしまうような、多様性や包摂性という考え方には決して近づくことのできないような危険性をはらんでいると私は感じている。そしてアメリカにおいては、外国語教育として、スペイン語やドイツ語、中国語など、種類も豊富であるが、本格的に始まるのは高等、大学教育からであり、スコアに要点をおくイマージョン教育ほど、学習者に抵抗感を与えるものはないだろう、と感じたので、イマージョン教育においても、言語を使用できる楽しさに要点をおいた教育にシフトすることができるとより言語学習へのモチベーションが維持できるのではないかと感じた。

今回のフォーラムでは、人種差別や言語教育、子どもの第二言語教育など、どちらかという、現代においては多くの議論や研究が行われた、主流な観点であったように思う。私個人としては、日本における非日本語母語話者のための日本語教育に関して、より具体的な問題点を挙げ、自分の考えだけでなく、改善策にまで落とし込みたかったのだが、調査不足によりその提案に至らなかった。言語教育によって多様性、包摂性はかなり実現できるように感じるが、構想の段階から、行動の段階に移れるようにこれからできることを深めていきたい。

## 2. 言語使用・学習の側面

今回、私個人としての反省点として、自分の話す英語に自信が持てず、特に Zoom でミーティングを開いた際に、積極的に英語で発言することができず、ヴァッサー大学側のメンバーの高い日本語力に甘えてしまった部分がある。まだ私自身も 1 つ目のセッションで述べたような、言語を「話したいから話す、楽しいから学ぶ」という考えにまで至っていないことに気づくことができた。私は、母語ではない言語で自分の意志を伝え



たり、発表したりして、相手に伝わったとき、共有できたときに、いつも、世界と繋がることができたような感覚を覚える。世界市民という言葉を使ってしまうと少し大げさな気もするが、私はここ最近のAI技術の発展を見ていると、現代を生きていくものとして、今後大切なのは、言語能力ではなく、世界に溢れている不平等や差別や破壊行為に気づき、目を向け、それらに対してどういう考えを持つことができるか、だと感じる。今回はプレゼンテーションの原稿やスライドの準備で忙しく、なかなか時間を取れなかったのだが、自分たちの考えを拙くてもいいし、完璧でなくてもいいのでぶつける時間を通して、言語能力なんて関係ない、どう世界を捉えているかだ、と感ずることができればよかったと思う。

### 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

コロナウィルスによってパンデミックが起こって4年が経とうとしているが、オンラインでイベントや授業が行われることの利点としては、今回のように、インターネットを通じて物理的距離を気にせず、どこにいてもいつでも相手と繋がることが挙げられると考える。しかし、それはインターネット環境に大きく左右される。私だけではないと思うのだが、オンライン開催の最大のネックはインターネット環境、この点であると感じている。また、対人ではなく、対パソコンやスマートフォンの画面相手であるため、対談や議論をしている実感が湧かないという点もオンラインの限界だと感じる。

人との繋がりが疎遠になり、オンライン技術の進化により、同時に、人との距離がいまいになってしまった。これからの時代の共生社会にどういった影響を与えるのか、まだ、未知である分、オンラインの技術を悲観的に見るだけでなく、これを新しい日常としてポジティブに受け入れていかなくてはならないと思う。

### 4. その他

今回の大きなテーマが、“Diversity”と“Inclusion”、「多様性」と「包摂性」であったが、このフォーラム中、常に、このテーマは誰のためのもので、どのようにすれば

実現できるのか、それともすでに実現されているものなのか、という風に、捉え方に迷う部分が何度もあった。私たちは、血液型、年齢、人種や言語やジェンダーなどさまざまなカテゴリーによってカテゴライズされるし、カテゴライズしてしまいがちである。そういったカテゴリーも多様性と呼べるのであれば、私は、それらは実現するものではなく、個性と似ていて、いくつも存在するものだと考える。では、包摂性とはどうやって実現されるのか、という話をすると、これに関しては、多様性をまとめ、束ねる、秩序として機能していくべきだと考える。これから、自分が、言語教育を専攻していきたいと考えているので、“Diversity”と“Inclusion”という観点を研究分野に落とし込んで、学びを楽しんでいきたいと思う。

## 5. 自身の担当

私は今回、グループ2の中では、日本における非日本語母語話者の方たちの現状と、これから改善すべき課題、そして日米の言語教育を比較した際の相違点と共通点を担当し、英語で発表した。作成、発表したスライドは8、9、11、12枚目である。

## フォーラム修了レポート

### 多様性はいかにして包摂することができるのか

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

事前学習では、マイノリティの人々に対して日本社会はどのように不平等であるかということを経験的に概観することができ、ぼんやりとしていた理解がクリアになった。多様性というとマイノリティの人々が抱える問題のように聞こえてどこか他人事のように感じていたが、調べ学習をしたりディスカッションを行ったりする中で、社会の一員である以上自分にも関係があり責任を持たなければならない問題だという意識へと変わっていった。3 グループの発表の後には、更に考えを深めるための設問が新たに提示されて意見交換が行われたが、そこで包摂について考えることの難しさを実感した。マイノリティに配慮して彼らが地域社会で生活していくための支援を行うことは必要だが、それらの支援が地域社会に同化することを強いるものになっているのではないかという問題がどうしても付きまとう。では、どうすれば多様な人々を一つの社会に包摂することができるのか。現状、日本において日本語が母語レベルではない人々は高等教育を受けたり希望する職に就いたりすることが難しい。これは日本の業績主義的な考え方や進学の制度による問題であるが、これらを変えようとする動きよりも、移民の子供に対する日本語の就学支援や学習支援が主になされている。もちろん日常生活を円滑に進めるためには言語支援も不可欠だが、マイノリティの人々にも同じように機会が与えられ自己実現ができる選択肢を作ることが何よりも重要なのではないかという考えに至った。つまり、多様性の包摂とは、マイノリティを受け入れ国の社会に適応させるということではなく、社会の構成員が多様に変化していくのに合わせて受入国の在り方も柔軟に変えていくという視点なのではないだろうか。

#### 2. 言語使用・学習の側面

私たちのグループでは、ディスカッションなど複雑な内容について話すときは学習言

語で自分の考えていることを正確に伝えるのが難しく、互いにそれぞれの母国語で話すことが多かった。相手が英語で言っていることは理解できても、自分の言いたいことをその場で英語を用いて伝えるのは難しく、スピーキング能力の至らなさを痛感した。しかし、互いに違う言語を使っているにも関わらず高度な内容のコミュニケーションを取ることができるという経験は新鮮なものであり、これも多様性を包摂する一つの方法なのではないかと考えた。無理にどちらかの言語に統一するのではなく、自分の考えをありのままに表現しやすい方の言語を場に応じて自由に選択し、表現が難しすぎれば部分的に相手の言語で説明を試みて互いに歩み寄るというやりとりは、複言語能力を向上させるための良い機会となった。

一方で、それぞれ使いやすい言語が違うことによって意思疎通が上手くいかなかったこともあった。それぞれの調べたことをまとめたスライドが完成した後で考察とまとめのスライドが残っていたのだが、分担や打ち合わせをするのが面倒だと感じてしまって連絡や相談を怠り、多少の苦勞を請け負って日本側のメンバーだけで進めてしまった。普段使用する言語が異なる他者とコミュニケーションを取る際に、相手の言語を完璧に使いこなすことはそれほど重要でないと考えたものの、相手の言語が上手に話せないということで引け目に感じる気持ちやハードルが生まれてしまう事実も否めないのだろう。

### 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

教室で受ける授業では先生と生徒という関係性や発表者と聴講者という境界が教室での位置関係を通してはっきりと区別されるが、オンライン上では出席者全員が画面上に同じように並んでいるという特徴がある。このことによって、講義を受けたり他のグループの発表を聞いたりするフェーズでも受動的にならずに参加することができ、対等な立場であるという意識で双方向のディスカッションができたように思う。

しかし、やはりコミュニケーションの円滑さには限界があり、対面のようにスムーズにはいかない。皆の顔が画面上に同じように並んでいるという特徴についても、相手に

関して限られた部分の情報しか得られず、自分との差異や多様性を実感することが対面の場合と比べると少なかったように思う。とはいえ、やはりオンラインで繋がることの最大の意義は、自宅にいながら海外にいる人たちとリアルタイムで顔を合わせて話すことができるという点にあると思う。留学といった特別な機会ではなく、自分たちの学校や自宅にいながら zoom を通じて教室空間が拡張されることで、多様な人々が包摂される教室空間が身近に形成され、多様性と包摂が日常の一部として当たり前感覚になっていくのではないかと考える。

#### 4. その他

今回私は日本側 3 人とアメリカ側 3 人のグループだったが、グループメンバー 6 人がそれぞれ独立して対等な関係であったというよりは、日本側 3 人が密に連携して学習を進めていた一方でアメリカの 3 人は各々興味のあることを調べていたため、グループのバランスが悪くなってしまったという反省点がある。アメリカ側の 3 人とも密に連携しより一貫性のある発表にできれば良かったと思う。

#### 5. 自身の担当

事前学習：額賀美紗子 芝野淳一 三浦綾希子 編（2019）『移民から教育を考える—子どもたちをとりまくグローバル時代の課題』、ナカニシヤ出版

上の文献を読んで、日米の多文化共生のための学校教育や外国人学校について学び、レジュメを作って共有した

スライド作成：8 枚目、29 枚目

原稿作成・発表：8 枚目、26 枚目～最後

## フォーラム修了レポート

### 自身の意識の外に存在する多様性の発見

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

今回のフォーラムを通して、多様性と包括性の実現のためには、様々な背景をもった人々がともに議論に参加して考える必要があるということを知った。これは、議論を通して、立場や環境が異なれば必要とする対策も異なることや、一部の人々だけで良かれと思って話し合った結果の対策は、あるグループにとって包括よりも制限や抑圧になり得ると感じたためだ。

私が所属していたグループの大きなトピックは「移民の子ども達」であったが、議論を始めると、同じトピックを扱っていても、お茶大の学生は移民の子ども達への言語教育に注目し、ヴァッサー大の学生は不法移民の子ども達の問題や各種学校への差別の問題について特に注目していることがわかった。このように、お互いに想定していなかったそれぞれの背景に直面して初めて、今までの考えには包括されていなかった存在や多様性に気付くものであると実感した。また、包括性の観点から、メンバーに偏りのあるグループにおける議論では、先程述べたような多様性に気付く機会が無いと、ある人々にとって意図しない不利益や差別が生じる危険性があると感じた。印象的だった場面として、移民の子ども達への教育とアイデンティティという文脈の中で、お茶大生だけの議論においては、「移民受け入れ社会への同化か孤立か」という前提に基づいた議論が行われていたが、これに対して、ヴァッサー大の学生はこの二項対立的な前提自体に疑問を投げかけた。多様な人々の在り方をそのまま肯定するヴァッサー大の学生の認識に触れた後は、私たちの前提自体が包括性に欠け、多様性を抑圧しているように感じられた。

これらの経験と学びを獲得した点で、今回のフォーラムは大変有意義であったと感じる。包括性の実現とは、自身の意識の外に存在する多様性に気づき、互いに肯定し合えることであるという学びを踏まえて、今後は、多様な立場の人々との議論の場を大切に

したいと思う。

## 2. 言語使用・学習の側面

共通の母語を持たない者同士が属する集団であっても、お互いの言語をある程度習得している状態であれば、専門的でアカデミックな分野における討論ができると実感できたことが、このフォーラムにおける言語使用・学習の側面における成果だと考える。また今回の経験は、より多くの人々との対話を持つための手段として、自身の言語力を向上させるよう努力したいと思える良いモチベーションとなった。

しかし今回の反省点として、個人としても、フォーラム全体としても、ヴァッサー大学側の学生の高い日本語力に頼った議論になってしまった部分が多分にあったように感じる。私の所属していたグループでは、ヴァッサー側の参加者3人中2人が日系アメリカ人で日本語がとても流暢だったこともあり、事前準備の議論の大半において日本語が用いられていた。また、フォーラム当日も含めて、彼らの日本語力なくしては、今回のような深い議論には至らなかったかもしれないという正直な実感もある。したがって、日本語ベースの議論になってしまった点に、互いの言語を用いて相互理解の促進を目指すという部分における限界を感じた。一つの改善策として、フォーラムの発表用の資料を事前にMoodleに公開することができるのではないだろうか。当日の楽しみが減ってしまうというデメリットはあるが、事前に大まかな内容を理解して、英語での質問を用意する時間があれば、今回よりはお茶大側も英語を使う意識が高まり、加えて議論もより深いものを期待することができるのではないだろうか。

## 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

今回のフォーラムは全面オンラインでの実施であったが、日本にいながらにして海外の学生との交流や討論の機会を得られたことがとてもありがたかった。対面での実施であればより多くの参加者との交流が可能となる等、様々なメリットもあると考えられるが、オンラインでの実施だからこそ参加できる参加者もいるだろう。海外へ行く程のま

とまった時間が取れない参加者や経済的負担を感じる参加者にとって、より気軽に海外の学生と交流できるこのフォーラムは貴重な機会である。オンラインでの海外学生との交流機会であること自体に私は大変意義を感じている。

改善点としては、このフォーラムの開催時期の変更を提案したい。理由は日本アメリカ双方にとって、お正月やクリスマスといった休暇シーズンと重なっており、授業外でグループメンバーが集まって議論をするための時間の調整が困難であると感じたためだ。開催時期を後期から前期に変更することで、オンラインでもよりスムーズな交流を図ることができるのではないかと考える。

#### 4. その他

今回、オンラインでの交流機会を用意してくださった先生方や、新たな学びや気づきを与えてくれたお茶大、ヴァッサー大の皆さんに感謝申し上げます。有意義な時間をありがとうございました。

#### 5. 自身の担当

事前学習として、授業時間外でのグループミーティングに計3回出席し、その際のメンバー間の日程調整も一部担当した。発表スライドは、9～11、27枚目の作成を担当した。また、ヴァッサー大の学生1名分の発表原稿の修正を担当した。

フォーラム当日は、スライド9～11枚目を発表した他に、グループ1の司会の英語部分を担当した。



## フォーラム修了レポート

### フォーラムでのコミュニケーションから得られた成果と今後の展望

#### 1. Diversity & Inclusion についての学びの側面

今回の国際学生フォーラムでは” Diversity & Inclusion” というテーマのもとで、バックグラウンドの異なる学生同士が討論を繰り返していくことを通して、それぞれが置かれた環境における多様性とは何か、包摂性をめざすためにどのような態度が求められているか、ということを経験する機会となった。本レポートでは、主に事前準備におけるヴァッサー大学の学生たちとの討論において、どのような学びや課題が見つかったかについて述べていきたい。

まず初めに直面した課題として、日米で「多様性の課題」に対する視点が異なっていたことが印象的だった。今回のフォーラムで私たちのチームは「移民の年少者教育」というテーマで、「子ども」「マイノリティ」という二重のバリアを抱えた移民の子どもたちが直面する課題について、日米の事例比較を通じて考察した。移民労働力を重要視する近年の日本において、外国にルーツを持つ子どもたちは急速な増加傾向を見せており、義務教育課程というのは日本に住む子どもたちが「多様性」に触れる最初の機会であると考えられる。このテーマをお茶大の学生が提案した段階では、私たちは教室における差別的視点やマイクロアグレッションなどが、彼らのアイデンティティ構築に与える影響について、や国際教室など多文化的交流が予想される場所に対する支援の拡充などに主に着目していた。しかし、いざ発表に向けての討論を進めていくと、ヴァッサーの学生は移民年少者教育に対する政策上の差別や非正規滞在者をエンパワーする社会制度の必要性など、構造上の包摂性について着目している印象だった。これを踏まえて、発表の構造としては、日本側はミクロな視点を、マイノリティの分母が大きいアメリカ側はよりマクロな視点で教育課題を考察することにしたのだが、このような視点の差異から、自分たちが日本における移民の子どもたちの教育状況を考察するうえで「日本人がマジョリティである」という前提のもとにつくられた教育制度を疑っていないことに

気づいた。現在の日本の教育制度は子どもの移動や移民を想定しておらず、その教育制度の下で日本社会に適応した暮らしをするためにローカルな視点で支援を拡充させているが、その構造自体を見直す時期が来ているのではないか。日本に住む人の中には多様なバックグラウンドをもった人々が存在し、それは今までと同じような「日本人像」として括ってよいものではない。自分にとってより身近であるローカルな視点で多文化共生を考えることも重要であるが、もっと広い視点での「包摂性」に関する課題について目を向けていくことで、自身の根底に染み付いた同化主義的な思考に気付くことができると、今回の討論を通して学ぶことが出来た。

## 2. 言語使用・学習の側面

今回のフォーラムを通して、相互に学習言語を使用して継続した討論の時間を持つことができたこと自体がとても貴重な機会であったと感じる。相互に異なる言語を使用しながらのディスカッションを経験したことが無かったため、十分に説明しきれない箇所の説明を母語やジェスチャー、文献といった視覚的情報に頼ったり、グループメンバーのサポートに頼ったりする場面が多々見られたが、それも円滑にコミュニケーションを進めるうえでの一つの方法であり、互いに配慮しあった結果といえるのではないだろうか。

しかし、発表の結論を準備する段階では、学習言語におけるコミュニケーションに限界が見られた。ヴァッサー大学側の学生の日本語レベルが非常に高く、日本に住んでいた経験のある方もいらしたため、論理や情報を整理する段階においては、母語使用が非常に多くなっていた。こうした形式のフォーラムで複雑な単語やニュアンスの確認に双方が母語を使うと、議論がスローペースになってしまうという課題があると考えられる。また、そうした状況で母語が行き交ってしまうことも含め、日本側同士、アメリカ側同士の会話では必ず母語が使用されていた。コミュニケーションにおいて疎外されてしまう人がいないか、ということ常念頭にしておく必要があったと感じる。

### 3. オンラインでの実施（評価点・改善点）

今回のフォーラムでは事前準備、発表ともにオンラインでの同期型コミュニケーションという形をとったが、授業外ミーティングの時間も基本的に授業と同じ時間に固定して行う、という方向性をとったため、それなりに円滑にコミュニケーションできた。しかし、時間によっては日程調整が必要となる場合も多々あり、そういった場合に SNS を通して円滑な意思疎通が出来たかどうかという点に関しては課題として挙げられるだろう。SNS での連絡や zoom での最終討論も含めオンライン上でやり取りを行う場合は、対面ほど密度のあるコミュニケーションを行うことができないため、相互により積極的に歩み寄る姿勢が重要だった。

### 4. その他

今回、オンラインで海外の学生と一つのテーマについて討論、発表準備を進めていくという非常に貴重な経験ができたことを大変うれしく思っているが、こうして振り返ってみると、やはり対面でもっと密に交流を深めたかったという思いがある。今後、遠隔でやり取りをする機会があれば、今回の経験を十分に生かしていきたい。

### 5. 自身の担当

文部科学省の調査や参考文献をもとに、「日本における義務教育の背景」、「移民の子どもたちの現状について」というパートにおける事前調査と発表を担当した。今回は「移民の子どもたちの自己実現について」をテーマとしたが、日本の学歴主義的教育背景の下で、日本の学校に通わない／通えない不就学状態の子どもたちが生まれてしまう原因や、中退の原因などをまとめて発表した。また、授業時間で比較した日本とアメリカの課題における共通点と相違点をスライドにまとめた。

#### 【スライドで自分が使用した参考文献】

・額賀美紗子，芝野淳一，三浦綾希子編著（2019）『移民から教育を考える 子どもたち

をとりまくグローバル化の課題』ナカニシヤ出版

・文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」

令和4年度10月

[https://www.mext.go.jp/content/20221017-mxt\\_kyokoku-000025305\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221017-mxt_kyokoku-000025305_02.pdf)